

河内 水走氏館(水走城)(市指定史跡)(東大阪市五条町 5)

水走城（みずはやじょう）は大阪府東大阪市水走にあったとされる城である。

【遺構】

平岡連（ひらおかのみらじ）の子孫と言われる水走氏は、同市五条町周辺を本拠地とし、河内郡や若江郡などに数多くの領地を有していた。

そのうちのひとつ、水走の地（現在の近鉄けいはんな線吉田駅周辺）は、平安時代末期から開発が行われ、代々相続されたことが『水走文書』に記されている。

この地では、昭和 54 年の試掘調査によって水走遺跡が確認され、その後の発掘調査によって、平安時代の堤防や鎌倉時代の住居群をはじめ、中世の遺構や遺物が数多く発見された。

遺跡の中央に、幅 50m、水深 4m を超える旧大和川の支流、吉田川が確認されており、川の両岸からは建物（柱穴）跡とともに大溝が検出され、集落の周囲に堀を巡らせていたと考えられている。

【歴史】

正平 15 年（1360）、南朝方の攻勢が強くなると、河内国の守護代であった杉原周防入道は誉田城を放棄し水走城に立て籠もって京からの援軍を待ったが、楠木軍の猛攻により 1 日の抵抗の後、奈良方面へと落ち延びた（『太平記』巻第三十五）。

【水走氏館】

『水走文書』によると、鎌倉時代に水走氏の屋敷が東大阪市五条町あたりに存在し、寝殿・中門・倉などがあったとされているが、発掘調査では同時代の屋敷跡は見つかっていない。現在は、文化 8 年（1811）水走忠良によって造立された水走氏の墓塔が残り、館の存在を物語っている。

「ニッポン城めぐり」による

水走氏の成立

河内国一ノ宮の枚岡（平岡）神社や大津神社（河内）を管掌した神官で中臣氏と同流の枚岡神社の主神の天兒屋根命（あまのこやねのみこと）を祖とする平岡連の末裔に当たるのが水走氏である。水走氏は本拠地に館（いわゆる、水走氏館、現在の東大阪市五条町）を構え、河内国中部および大和国の一部（現在の東大阪市、大東市、八尾市、生駒市など）を支配した有力豪族。平安時代後期に枚岡神社の神職であった平岡連の一族から水走氏が分派し、枚岡神社の社領や大江御厨を守る武士団へと成長していった。現在の水走は内陸部にあるが、古来、この地まで深田や沼地が続き、旧大和川の支流や寝屋川など多くの河川や深野池などの湖沼や河川があり、水運が発達しており、港があった。それらを管理することで水走氏は漁業権と水運権を確保し、御厨（皇室系荘園）を管理することで大きな力を持つ武士団へと成長していった。

河内源氏との関係

河内国の壺井（大阪府羽曳野市壺井）を本拠地として、関東・奥州に出陣し、朝廷内部でもその武力を背景に力を誇示した河内源氏の源義家（八幡太郎義家）やその子、源義忠の家人となってその地位を安定させ、更なる飛躍を遂げた。しかし、平安時代末期、治承・寿永の乱の際に、源氏方の源義経から兵糧米など供出などを命じられ、水走氏の地域支配に対して干渉される事態となった。しかし、時の当主水走康忠は源氏に対して、父、水走季忠は源義家、源義忠の二代に仕えた源氏累代の家人であると主張し、源氏の家人の賦役は軍役であって兵糧米を供出することではないとして兵糧米の供出をことわり、代わりに軍勢を西国に派遣した。また水利権などに関しても源義忠より認められた水走氏の権利であることを主張して認められた。鎌倉時代を通じて、この地域に支配権を確立し、枚岡神社やその地域の社寺を統括し、花国山観音寺などの別当職などを務めるなど活躍した。

その後の水走氏

鎌倉幕府の滅亡の際には、当主の水走康政はいち早く河内国南部で反幕府の挙兵をした楠木正成に同心して活動するなど機敏な対応をしている。しかし、それに続く、建武の新政に反旗を翻した足利尊氏の挙兵などには同心せず、従来どおり楠木正成に従い、湊川の戦いで楠木正成が敗死した後も楠木正行に味方するなどしたため、高師直らの攻撃を受けて降伏する憂き目を見た。しかし、その後は、河内国守護となった畠山氏のもとで既得権益を縮小しながらも維持し室町時代を生き抜いた。だが、戦国時代になって畠山氏が没落すると水走氏も没落し、枚岡神社の神職として生き残る道を選択せざるを得なくなり、歴史上での活躍は見られなくなる。後に、江戸時代後期に、時の当主、水走忠堅の後、養嗣子となった水走飛騨守忠良は医学を学び、詩文・俳諧につうじた学者となり河内の地に名を残している。現在、子孫はこの地にはなく、東京都に在住している。

Wikipedia による



水走忠良によって造立された水走氏の墓塔



枚岡神社

